

平成 28 年度 校内研修計画

大藤小学校

1. 学校課題

大藤地区は、緑が豊かで、古くから、桃、すもも、ぶどうなどの果樹栽培を中心としている地域である。学校と地域との結びつきが強く、保護者や地域は学校教育に関心が高く、深い理解のもと様々な活動にとっても協力的である。本校が取り組んだ「開かれた学校づくり」の研究や「甲州市確かな学力育成プロジェクト」等の様々な取組によって、より一層地域との結びつきが深まってきている。児童は、温かく優しい地域の人々に見守られ、明るくのびのびと生活している。

本校児童は56名。全学年が単学級であり、一番児童数が多い学年が13名という小規模校である。中・大規模校と比べると個に応じた指導がいき届きやすいが、社会の変化に伴い、児童一人ひとりの個性は多様化し、学習意欲や学習能力の個人差も見受けられる。

各学年における児童の課題として、「自分の考えを、言葉や文章で伝えることが苦手である」、「友だちの考えを参考にしたり、自分の考えに取り入れたりすることがあまりない」、「家庭学習をする児童としない児童の差が大きい」などがあげられる。年々児童数が減少していることから、少人数を意識した授業の構築も課題である。

2. 研究主題

「自ら考え、課題を解決できる児童の育成」
～つなぎ、学びあう少人数での学習集団づくりを通して～

3. 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

社会のグローバル化が進み、知識基盤社会といわれるこれからの時代を、主体的に自立した人間として生き抜いていく資質や能力、つまり学習指導要領にうたわれる「生きる力」の育成が、学校教育に期待されている。

(2) 学校教育目標及び子どもの実態から

本校の学校教育目標は『自ら考え、正しく判断し、行動する児童の育成』である。具体的には、「自ら考えて学習する子ども」、「健康で明るい子ども」、「思いやりの心をもつ子ども」、「協力しやりぬく子ども」、「郷土を愛する子ども」の5つの姿を目指している。それを受けて、「確かな学力の育成」、「豊かな心の育成」、「健康でたくましい心と体の育成」、「地域に開かれた学校づくり」を重点目標としている。

知の側面である「確かな学力の育成」のために、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して思考力・判断力・表現力等を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うことが必要であるが、本校の特性である少人数のアドバンテージを生かした研究にしていきたい。そのために、QUを活用して児童一人ひとりの実態を丁寧に把握するとともに、一人ひとりの個性が生かされるようなきめ細かくダイナミックな授業展開を追究することとする。少人数であっても、子ども同士を豊かにつなぎ、学びあう集団を育成することにより質の高い授業が構築できるものと考ええる。

(3) 昨年度の研究から

本校は、平成22年度から「自ら考え、課題を解決できる児童の育成～思考力・判断力・表現力を高める指導を通して～」をテーマに研究を進めてきた。今年度も、継続して思考力・判断力・表現力を高める授業づくりに取り組んでいく。

さらに、昨年度から「少子化・人口減少に対応した活力ある学校推進事業」の研究指定を受け、ICTを活用した他校との交流やICTの指導計画づくりを行った。今年度も、ICTを使ったテレビ会議等の交流授業を行い、授業内容を活性化させ、本校の研究テーマ「自ら考え、課題を解決できる児童の育成」に迫っていくこととする。

4. 研究仮説

自分の思いや考えを友達の言葉と関わらせながら伝えることができる力をつけ、少人数におけるつながり合い学習集団・自ら学び合う学習集団づくりを行うことにより、自ら考え課題を解決できる児童が育つであろう。

サブテーマにしている「つなぎ・学びあう学習集団」とは、全員が共通の目標をもって学びながら、一人ひとりが認められる集団であり、互いに刺激しあいつつ、強調して高めあっていくことのできる集団である。

本校では、2～5名程度の母集団の人数が少ないことを「少人数」と定義し、少人数を生かした授業を研究する。

「つなぎ・学びあう学習集団」に育てていくためには、授業の中で子どもたちが積極的に対話し、安心して精一杯学習に取り組めることが大切である。そのためには、子どもたちに課題を明確に把握させ、学習の見通しをもたせるようにする。単に、自分の考えを発表するにとどまらず、協同して学習し、自ら自身の学習を振り返る。このような授業を展開す

ることにより、自ら考え、問題を解決できる児童が育つであろう。

5. 研究の具体的内容と方法

(1) 研究内容

- ・ 少人数や小集団における効果的学習方法（ICTの活用も含む）を取り入れた授業実践および授業公開の実施（一人一実践の取り組みを生かす）
- ・ 児童の実態把握（NRT検査・QU・アンケート）とK-13簡易法を用いたQUの結果分析とアタックシートを活用した集団づくり
- ・ 学びを促す家庭学習環境づくり
- ・ ICTを活用したカリキュラムづくりと学校や地域の良さと学習成果を外部へ発信する取り組み

(2) 研究方法

- ・ 全体研究会を中心に研究を行う。授業実践を核に研究を、職員の共通理解のもと取り組むようにする。
- ・ 外部講師を招いて、ICTに関する理解を深め、ICTの活用力と実践力を高める。
- ・ 授業改善について研究し、一人一実践を通して学びあう。
- ・ NRT検査、QU、アンケートを使い児童の実態を把握し、それを様々な場面で生かす。

(3) 検証方法

- ・ 2回のアンケートとQUでの変化の様子
- ・ 授業実践での児童の変容、ノート等の記述

6. 年間研修計画

研究主任 川野 和昭

回数	研究テーマ	教科・領域	担当	学年	授業時期	TC要請
1	今年度の方向性について	授業改善	川野	全		
2	学校課題、研究主題、研究内容・方法、年間計画、アンケートについて iPadを使った授業について	授業改善 ICTの活用	川野	全		
3	学校課題、研究主題、研究内容・方法、年間計画について 家庭学習について	授業改善 学級集団づくり	川野 藤原	全		
4	edutabの使い方について	ICTの活用	川野	全		
5	NRTの分析とK13法によるQ-Uの分析（1, 2学年）	学級集団づくり	廣瀬 有井	1,2年		
6	NRTの分析とK13法によるQ-Uの分析（3, 4学年） アンケートの分析	学級集団づくり	川野 藤原	3, 4年		
7	NRTの分析とK13法によるQ-Uの分析（5, 6学年）	学級集団づくり	坂本 荒井	5, 6年		
8	授業案検討	授業改善	坂本	全	6月末	
9	5年生研究授業	授業改善	坂本	全	7月初旬	○
10	教育課程研修還流報告会と県学力把握調査の分析と対策について	授業改善	有井 川野	全		
11	ICT学習会	ICTの活用	川野	全		○
12	一人一実践と全国学力テストの分析と対策について	授業改善	川野 有井	全		
13	授業案検討	授業改善	廣瀬	全	10月初旬	
14	1年生研究授業	授業改善	廣瀬	全	10月下旬	○
15	K13法によるQ-Uの分析（4, 5, 6学年）	学級集団づくり	荒井 坂本 川野	4, 5, 6年		
16	K13法によるQ-Uの分析（1, 2, 3学年）	学級集団づくり	有井 藤原 廣瀬	1, 2, 3年		
17	研究紀要作成について	授業改善	川野	全		
18	後半のアンケートの考察,	授業改善	藤原	全		
19	少子化・人口減少に対応した活力ある学校教育推進事業のレポートについて	ICTの活用	川野	全		
20	県指導重点についてと研究の成果と課題について	授業改善	校長 川野	全		

